

書 評

棚瀬慈郎・島村一平編『草原と鉱石——モンゴル・チベットに
おける資源開発と環境問題』明石書店 2015年
Jiro Tanase & Ippei Shimamura (eds.),
Steppe and Mine: Natural Resource Development and
Environmental Problems in Mongolia and Tibet

滝 口 良

(北海道大学大学院)

TAKIGUCHI Ryo

(Graduate School, Hokkaido University)

本書は、モンゴル・チベットの草原を舞台に繰り広げられる地下資源開発と草原の民の関わりを文化人類学・環境科学・歴史学的研究により明らかにした論文集である。近年、モンゴル国及び中国内モンゴル自治区では地下資源の開発が急速に進められ、とりわけモンゴル国はグローバル企業が押し寄せる資源大国となりつつある。地下資源の開発は、これまで牧畜が営まれてきた草原地帯の様相を一変させた。水や土壌をはじめとする環境汚染、ヒトへの健康被害の懸念、人口の流入、貧富の差の拡大、貨幣経済の浸透など、地下資源の開発は近隣地域にかつてないほどの大きな影響を与えていることは間違いない。だが、地下資源開発による影響は人間社会と自然環境の多岐にわたるため、その影響の全体像を把握することは必ずしも容易なことではない。

こうした問題にとりくむ本書の特徴は分野横断的かつ広域的な研究であることだ。本書のもととなった滋賀県立大学学内プロジェクト「内陸アジアにおける地下資源開発による環境と社会の変容に関する研究——モンゴル高原を中心として」(代表：棚瀬慈郎)ではモンゴル科学アカデミー地球環境学研究所および歴史学研究所をはじめとして、国内外の文化人類学・環境科学・歴史学などの研究者が集められ、モンゴル国・内モンゴル自治区・中国青海省黄南チベット族自治州などで調査が行われた。本書は、世界有数の埋蔵量によって注目を集める同地の地下資源開発と環境問題を社会と自然の両面から総合的に扱う研究のさきがけとなるものである。

本書がこのように分野横断的かつ広域的な研究であるのは、本書がモンゴル・チベット高原における地下資源開発という主題を「『草原と鉱石』という古くて新しい問題」としてとらえるためである。この問題が「古い」ものである理由は、内陸アジアの遊牧世界において地下資源開発は近代以降になってはじめて行われたものではなく、それ以前から鉱物は草原地帯の支配を左右する軍事的・経済的・政治的・宗教的な力を持っていたためである。そのため、「草原と鉱石」という問題系は、遊牧帝国の時代から連綿と続くものであり、遊牧世界に持ち込まれた「開発」という近代の問

題系でのみとらえることはできないと本書は論じる。

他方、「草原と鉱石」という問題は「新しい」ものでもある。その理由の一つは草原の支配に深く関わる鉱石の力が近現代になるとソビエト連邦やグローバル企業などによる「開発」のターゲットとなったことにある。このことにより草原地帯における鉱物資源の採掘はかつてないほどに大規模化し、これに伴ってヒトや家畜、自然環境への被害も深刻化していく。こうして「草原と鉱石」という問題系は、「環境問題」という「新しい」問題に接続されることになったのである。

本書の対象となるのは、モンゴル・チベット高原において「環境問題」化した地下資源開発による社会と自然の変化である。莫大な富を生み出す鉱石は、家畜が草を食んでいた草原を人々の集まる都市に変え、地域社会を鉱山利権を中心に再編する。鉱石の採掘はまた、草原の土壌や水を汚染し、牧畜を営むことできない土地へと変えつつある。本書は現地調査を通じてこうした変化のプロセスをつぶさに跡づけることによって、新たな形を取りつつある「草原と鉱石」の関係を総合的にとらえる観点を構築する試みであると概略できよう。

本書は三部からなっており、「草原と鉱石」をめぐる変容に対して人文社会学と自然科学の双方の側面からアプローチするという構成をとっている。第一部「地下資源開発の歴史と社会変容——モンゴル」では、歴史学・文化人類学的な観点からモンゴル国の鉱山開発の歴史と社会変容が報告されている。社会主義体制下のモンゴル—ソビエト共同の地質学調査の歴史を通覧したS.チョロンの論文「鉱物を探し求めて——地質学をめぐるモンゴル—ソ連共同調査の歴史」、秘密協定によってモンゴル人の立ち入りが禁止され、ソビエト国民のみが居住するウラン鉱山都市マルダイを主題としたグレゴリー・デラプラスの論文「モンゴルの『露わなる宝』——ウラン鉱山都市マルダイについての覚書」は、社会主義時代の地下資源をめぐるモンゴルとソビエトとの不可分の関係を明らかにしている。つづくG.ジャンバラクチャーと島村一平の論文は、ともオユートルゴイ銅・金鉱山における地域社会の変容と地域住民の反応について明らかにしている。

ジャンバラクチャーの論文「衛星牧民——モンゴル・オユートルゴイ鉱山開発を巡る遊牧民の生存戦略」は、遊牧民にとり鉱山開発は牧草地と水源を減少させるものである一方で富の獲得機会を増加させたことに注目する。遊牧民は家畜を飼う家族成員と郡中心部において現金収入が得られる鉱山関係の仕事に就く家族成員というように家族を「副家族」に分ける戦略をとっているという。さらに、家畜を世話するものの減少から一定の給金で家畜を放牧する「雇われ牧民」という社会階層が生みだされている。このように鉱山開発は、鉱石から生みだされる富の獲得という目的に組み込まれた「鉱山に追随する」遊牧という新たな生活様式を生み出した。こうしてジャンバラクチャーは、鉱石が生み出す巨大な富に対し人々が多様な仕方で適応するなかで生み出される社会を描いている。

同じくオユートルゴイ鉱山で調査を行った島村の論文「鉱山を渡り歩くシャーマン——モンゴルにおける地下資源開発と『依存的抵抗』としての宗教実践」は、鉱山地帯で活発になるシャーマニズムについての論考である。島村は鉱山資源開発が当該社会の人間行動を規定する新たなコンテクストとなっているだけでなく、鉱山開発によって副次的に生みだされたシャーマニズムもまた鉱山開発の新たなコンテクストを生み出すものであることに注目する。

島村によれば、オユートルゴイにおける地下資源開発は、地域社会内部に鉱石の生み出す富に与

ることができる者たちとできない者たちのあいだに社会階層を生み出した。興味深いことに、そのなかで地下資源の利権に与ることのできない、いわば鉱山景気のなかで最も割りを食っている、家畜を持たない郡センターに住む失業者たちのなかから、それまで地域社会に存在していなかったシャーマンたちが誕生しているのだという。

島村はシャーマンが鉱山都市において生み出されるメカニズムを精緻に描き出しているが、ここではその詳細を取り上げることはできない。重要な点は、シャーマニズムは持たざる者たちの功利的な適応(つまりはマルチ商法まがいの金儲け)などではなく、親族内の富の再分配や親族ネットワークの再構築を通じて鉱石が生み出した社会格差という現実を是正する試みだということである。換言すれば、鉱石によって新たな社会が生み出される際には、その社会の影の如くにシャーマンが現れ、オルタナティブな社会の可能性を示す。鉱石の富に与りながらも、鉱石が生み出した社会とは異なる自分たちの世界の可能性を生きようとするシャーマンの実践を、島村は「適応」でも単なる「抵抗」でもない「依存的抵抗」として理論化している。

第二部「地下資源開発による環境への影響——モンゴル」は環境科学的なアプローチでモンゴルの鉱山開発による環境変化を扱う4本の論文からなる。ジャブザン「モンゴル国の鉱山と自然環境」(第5章)、中澤暦・永淵修・岡野寛治「鉱山開発とヒトへの健康影響」(第6章)、ゲレルトオド・巖網林・ジャンチブドルジ「砂金採掘産業の環境への影響——モンゴル・トゥブ県・ザーマル金鉱の事例から」(第7章)、Ch.ジャブザンほか「鉱山開発が河川の水質に及ぼす影響——オルホン側支流域における金採掘を事例として」(第8章)である。第一部所収の論文が鉱山開発と「社会」との関係についての研究成果だとすれば、第二部の論文は鉱山開発がもたらす「自然」への影響、そしてヒトと家畜への影響に関する調査の成果である。いずれの論文もモンゴル各地の鉱山開発が自然環境に深刻な影響を与えていることを明らかにしており、地下水、河川水、土壌等の汚染が人の健康に影響を与えかねないレベルにあることを示している。この原因には不十分な地表管理や環境修復措置、「ニンジャ」と呼ばれる個人金採掘業者たちによる採掘が放置されている現状など、鉱山開発に伴う人為的・社会的要因があることを各論文は指摘している。

第三部「資源開発に抗うのか、適応するのか——内モンゴルと青海チベット」では中国国内の内モンゴルと青海省のチベット人居住地帯を対象とした文化人類学研究が収められている。内モンゴルを対象とするウチラルト「内モンゴルの環境抗争運動」(第9章)、包宝柱「鉱山開発にあらがう『防波堤村』の誕生——中国内モンゴル自治区ホーリング炭鉱の事例から」(第10章)では、それぞれ環境を守るために住民が抗う事例が扱われている。ウチラルトは汚染源である工場に対し公的に認められた法律や制度を用いて異議を唱える住民の行動を、民族主義的の反抗とは明確に異なる「有権的反抗」としてとりだす。包は住民と地方政府が共同して資源開発に対抗する事例として、旗政府が地方行政単位の再編や住民の移住による「防波堤村」の建設によって資源開発から牧草地を守ろうとしている事例をとりあげている。これらの論文では、第一部で見たモンゴルの事例と異なり、草原の破壊に対する地域住民や地方行政のリアクションが開発の現状への「適応」といったものではなく、開発の側に立つ者にとって脅威となる「抵抗」となっている。

続いてチベットを対象とするのがデンチョクジャブ「誰のために何を守るのか?——中国環境保護政策と青海省チベット族」(第11章)、ナムタルジャ「草原を追われる遊牧民——中国青海省黄南チ

ベット族自治州における生態移民、定住化プロジェクトについて」(第12章)、棚瀬慈郎「公害、退耕還林、産児制限——中国青海省黄南チベット族自治州の村から見た現代中国」(第13章)である。これらの3論文に共通するのは「公害と退耕還林という、正反対のベクトルを持った、外部からコミュニティに加えられた力」(p.288)という歴史的背景である。遊牧民にとって開発と環境保護はともに遊牧という伝統的生業を困難にするものであった。さらに、第一部でみたモンゴルの事例と同様に、貨幣経済の浸透により人びとは現金収入をより求めるようになり、出稼ぎや価格の高騰した冬虫夏草の採集によって伝統的な牧畜を担ってきた家族形態は変化していく。いずれの論文も、公害と退耕還林という自然環境の変化と貨幣経済及び漢化の浸透という社会状況の変化に人びとが能動的に適応する姿を描いているが、その一方で伝統的生業を担ってきた文化の消滅への危機感を表明している。

最後の章となるのが、オラディン・E・ボラグの論文「道と路道学——モンゴルのナショナルな地理を再想像するということ」である。現代のモンゴル国における鉱山資源の輸送手段となる鉄道敷設のルートを選択する問題は、ボラグによれば、単純なインフラ問題などではない。中国との鉄道の接続は、モンゴルの経済発展の可能性を開くとともに領土的主権の喪失にもつながるという相反した感情をモンゴルの人びとに呼び起こすものだからだ。モンゴル帝国における駅伝制から近代における鉄道政策の歴史を振り返りながら、ボラグはその理由をモンゴルが「中国とロシアによって内陸に封じられた国」(p.298)という地政学的な自己理解をしてきたことに見出す。ボラグはこれに対して、二つの大国をつなぐ「通過領域」として自らを想像しなおす「希望の地理学」のもとで鉄道政策を構想することがモンゴルには必要であると結論付けている。

以上、本書の概略を構成にそって紹介してきた。モンゴル・チベットの草原における地下資源採掘をめぐる生じる変容を描いた本書は、人文社会科学と自然科学の双方からアプローチすることで、地下資源採掘が及ぼす多様な影響をトータルに捉えることに成功している。また、本書は複数の国家にまたがる地域を対象として設定することで、地下資源採掘が地域に与える影響やこれに対する地域の対応に関連する社会的要因を比較検討できる資料を提供している。同地域における地下資源採掘を主題とする研究は近年開始されたばかりであり、本書は今後の研究が参照すべき重要な成果となることは間違いないと思われる。

だが本書の意義はこれにつきるものではない。最後に、今後の議論の展開のうえで評者が重要と考える点をコメントしておきたい。本書の「序にかえて」において、モンゴルの遊牧世界の研究において「環境」概念を用いることの困難さが指摘されている。本書によれば、社会的「環境」であれ自然的「環境」であれ、「環境という概念は、空間的な広がり限定されることで設定し得る」ものであるという(p.12)。これは、一定の境界を有する地理空間を想定する「環境」概念では農耕世界に比して柔軟な空間的広がりを生きる遊牧世界の特質を捉え損ねてしまうということであろう。私たち研究者にとっては、それが人文社会科学であれ、自然科学であれ、研究調査に当たり一定の地理的な範囲を設定することは必須の要件である。その意味で私たちは研究対象とそのコンテキストとなる一定の地理空間という「環境」的な思考に深く囚われているといえよう。

遊牧世界を深く理解するうえでの「環境」概念の再考というアイデアは非常に興味深いものである。だが、残念ながら本書でこのアイデアが理論的に十分に検討されたとは必ずしも言いがたい。

それでも、例えばオユートルゴイ鉱山の資源開発が社会・宗教・自然それぞれの領域を変容させているさまを本書から読み取るうちに、オユートルゴイ鉱山をめぐる「環境」とは単なる一定の地理空間を指すのではなく、複数の現実の層が折り重なって成立しているものであることを読者は知ることができる。さらにはグローバル企業や環境保護的な国際NGOなどから鉱山資源に流れこむヒト・モノ・カネ・情報を加えれば、鉱山をめぐる「環境」の内外の境界はいつそうあいまいなものとなるだろう。

遊牧世界における草原と鉱石の関係を探り、地下資源採掘による地域社会の変容を跡づける本書は、遊牧の側から「環境」という概念そのものを問い直し、研究の対象となる空間の設定に再考を促す射程を有している。評者としては今後の草原と鉱石をめぐる研究のなかで、この議論がさらに深められていくことを熱望するものである。また、本書のもう一つの重要な貢献は、モンゴル高原・チベット高原という広域空間を一つの研究対象としてとらえなおしたことにある。このことにより、異なる分野、異なる地域の研究者のあいだで新たな問題を設定し、議論を喚起することが可能になるだろう。本書でボラグがモンゴルについて論じたように、私たち研究者にとっても研究対象の地理空間を再想像する「希望の地理学」が必要とされているのかもしれない。

